

## 現代文・知識

(問題冊子P.62～P.61)

### 解答

- 1** 問一 (1) こうてつ  
問二 (1) ざいばつ (3) いた(む)  
問三 (1) 消耗 (2) 揚 (3) 枝 (4) 吹雪 (5) 余裕
- 2** (1) ⑧ (2) ⑦ (3) ⑥ (4) ⑨
- 3** (1) ⑨ (2) ② (3) ⑩ (4) ⑫ (5) ④ (6) ⑪ (7) ③ (8) ⑤ (9) ⑥ (10) ① (11) ⑦ (12) ⑧ (13) ④ (14) ③ (15) ⑨

### 解説

- 1** 問一 漢字の読みの設問。  
(1) 「更迭」は、「こうてつ」と読み、その職にあたる人がかわること。  
(2) 「弔問」は、「ちようもん」と読み、遭族を訪ね、くやみを述べること。  
(3) 「財閥」は、「ざいばつ」と読み、大企業を支配する一族・一団のこと。  
(4) 「悼む」は、「いた(む)」と読み、人の死を悲しみ、嘆くこと。
- 問二 漢字の書き取りの設問。  
(1) 「厳か」は、威儀正しく、近寄りにくい様子。「厳然」「莊嚴」などの熟語とともに覚えよう。  
(2) 「吹雪」は、激しい風とともに降る雪。  
(3) 「消耗」は、使ってなくなること。  
(4) 「余裕」は、あまり・ゆとりのこと。
- 問三 四字熟語に関する設問。  
(1) 「旧態依然」は、昔ながらの状態のまま進歩のないこと。  
(2) 「意気揚々」は、意気があがって、得意そう

に振る舞う様子。

- (3) 「枝葉末節」は、本筋からはずれた重要な部分のこと。

## 古文・知識

(問題冊子P. 52～P. 50)

### 解説

- |      |          |          |          |          |          |          |
|------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
|      | <b>6</b> | <b>5</b> | <b>4</b> | <b>3</b> | <b>2</b> | <b>1</b> |
| (9)  | (5)      | (1)      | A (5)    | (1)      | (5)      | (1)      |
| (4)  | (3)      | (4)      | (4)      | (2)      | (5)      | (1)      |
| (10) | (6)      | (2)      | B (6)    | (2)      | (2)      | (2)      |
| (3)  | (2)      | (4)      | (4)      | (1)      | (2)      | (3)      |
| (7)  | (3)      | (7)      | (3)      | (3)      | (3)      | (3)      |
| (2)  | (1)      | (2)      | (4)      | (2)      | (2)      | (2)      |
| (8)  | (4)      | (4)      | (4)      | (4)      | (4)      | (4)      |
| (1)  | (1)      | (1)      | (5)      | (3)      | (3)      | (3)      |

### 解説

#### 1

(1) 紀友則の作。「ひさかたの」は、「光」にかか  
る詞。ほかに「天」「雨」「月」「雲」「日」など  
にかかるといえる。どれも天空に関連がある。枕詞は、  
ふつう訳す必要はないが、イメージを喚起する  
大切な働きを持つ。その点、序詞と共通してい  
る。違いは、枕詞がかかる語は固定的だが、序  
詞は個々オリジナルだということ。もちろんよ

くできた序詞は後の歌に利用されることもある。

- (2) 「ふみ」は掛詞だ。歌人として高名な和泉式部の娘、小式部内侍が「歌合の歌を母に代作依頼したのでは」と定頼にからかわれて、即座に詠んだという。「ふみ」に、「文」と「踏み」が掛けられ、「母の住む丹後路へ行つてみたことでもないし、手紙さえ見ていない。」と、和歌でからかいをはねつけ、定頼をやつつけたのだ。この歌には、ほかにも掛詞や縁語が詠みこまれている。これほどの歌が即座に詠める実力なら、代作依頼も必要ないというわけだ。
- (3) 「伊勢物語」東下りの一節にある。在原業平が都に残した妻に贈った歌。メッセージ内容は「現実でも、夢でもあなたに逢えないことよ。思い合つていれば、夢でも逢えるはずなのに、いったいどうしたことか。」「駿河なる宇津の山べの」は、音の関連から「うつつ＝現実」を導き出す序詞。

## 2

枕詞の知識を問う設問。

枕詞は、通常五音の語で、一定の語にかかり、句調を整えながら、歌に広がりや深まりをもたせる役割も果たす。選択肢として挙げたものは、いずれもよく使われる枕詞である。次にそのかかる語を紹介しておく。覚えておこう。

- あしひきの (あしひきの)  
——山・峰・尾の上へ
- たらちねの ——母・親
- くさまくら ——旅・ゆふ・仮・むすぶ
- ぬばたまの (むばたまの・うばたまの)  
——黒・闇・夜・夢・月
- ひさかたの ——天・空・月・光・雨・雲
- あらたまの ——年・月・日・春
- からころも (からころも)  
——着る・裁つ・紐・袖・裾
- うつせみの (うつせみの)  
——命・世・人・身・空し

## 3

- (1) 尊敬・謙譲・丁寧の違い、また動詞・補助動詞の違いはわかっているだろうか。敬語動詞は、それ自体が動詞の意味と敬意とをあわせ持つが、それはよく使う動詞に限られている。補助動詞は、一般の動詞に敬意をプラスする働きを

持ち、これを添えるとたちまち敬語表現ができあがるわけである。

- (1) の「おはす」は「来」の尊敬動詞で「いらつしやる」の意。
- (2) 補助動詞として用いられる「はべり」は丁寧語。「散りはべりし」で「散りました」の意となる。
- (3) 四段活用「たまふ」は尊敬を表す。ここでは補助動詞。「明かしたまふ」で「お明かしになる」の意となる。
- (4) 「奏す」「啓す」は謙譲の動詞で「申し上げる」の意。「奏す」は天皇に、「啓す」は皇后などに對して「申し上げる」意をもつため、絶対敬語と呼ばれる。
- (5) 「さぶらふ」は「あり」の丁寧動詞で「ございます」の意。

## 4

- (1) 主語は親王。「おはします」は、「あり」「行く」「来」の尊敬の動詞「おはす」の敬意をさらに強めたもの。ここでは「あり」の尊敬表現だ。現代人は、これほどデリケートな敬語をもたないので、「おはす」も「おはします」も同じ訳でよい。
- (2) 「おぼす」は「思ふ」の尊敬動詞。「お思いになる」の意。
- (3) 「おぼす」は「思す」とも書き、「思ふ」の尊敬動詞。主語のかぐや姫に対する敬意表現である。さらに敬意の強い「思しめす」という尊敬動詞もある。いずれも「お思いになる」「思いなさる」と訳す。
- (4) 「奉ら」は「与ふ」の謙譲の動詞「奉る」の未然形。「さしあげる」の意。「む」は意志の助動詞である。
- (5) 「奏す」「啓す」は謙譲の動詞で「申し上げる」の意。「奏す」は天皇に、「啓す」は皇后などに對して「申し上げる」の意を持つため「絶対敬語」と呼ばれる。この文では、客体が「おほやけ＝帝」であることが示されているが、それがなくとも「奏せよ」から「帝に申し上げよ」の意は明らかである。
- (6) 「候ふ」「侍り」の二つを、丁寧の動詞としてしっかりと覚えておこう。いずれも「あります」「おります」「ございます」と訳す。身分関係にかかわらず、書き手(作者)が読み手に、あるいは話し手が聞き手に対する敬意をこめて用い

られる。現代語の敬体（です・ます体）と考えるとわかりやすい。

- (7) 代表的な丁寧の動詞「はべり」が用いられているから、「います」と訳す。わらわ病みの回復が順調でない光源氏に対し、側の者が祈とうを勧めている会話文だ。ここで④の「いらっしゃる」としてしまった人は典型的な誤答パターン。「かしこき行ひ人」に引かれて、「はべり」を尊敬語で訳してしまったのだ。

5

A群では、①思ふ ②来<sup>く</sup> ③言ふ ④与ふのそれぞれの尊敬の動詞であるのに対し、④は、「行く」の謙譲の動詞である。

B群では、①・②・③・⑤がともに、謙譲の補助動詞。④のみ「行く」の謙譲の動詞である。

- 6 今回出題したものは、いずれも古文読解に欠かせない単語である。この機会にしっかり覚えよう。

- (1) 「おろかに」は形容動詞「おろかなり」の連用形。「おろそかだ・いいかげんだ」の意。「愚かだ」と誤らないように。
- (2) 「本意<sup>ほんい</sup>」は「もとの望み・本来の目的」の意。
- (3) 漢字では「眺む」と表記する。古今異義語。現代語の「眺める」と混同しないよう注意。「もの思いにふける・もの思いにふけてぼうつと見る」の意。
- (4) 「さうさうしけれ」は形容詞「さうさうし」の已然形。あるべきものがないもの足りなさをいう。現代語の「やかましい」の意と誤らないよう注意。
- (5) 「心にくし」は形容詞で、「奥ゆかしい・心ひかれる」の意。「にくし（いやだ・わずらわしい）」と混同しないように。
- (6) 「なかなか」は副詞。現代では、「なかなかうまくいかない」「なかなかいいね」のように用いるが、古文では「かえつて」「むしろ」の意が一般的である。
- (7) 「ののしる」は〈大さわぎをする〉が原義で、現代語のように「口ぎたなく言う」の意で用いられることはほとんどない。また、動詞の下につくと「大騒ぎしてゝする」「さかんにゝする」の意となる。
- (8) 「のがり」は「うのもとへ」の意の慣用句。

「人がり」で「人のもとへ」となる。

- (9) 「ゆゆし」は形容詞。多義語で「おそれおおい・不吉だ・恐ろしい・程度がはなはだしい」などの意があり、文脈に沿って意味を選択する。ここは、「程度がはなはだしくよい」すばらしい」の意。
- (10) 「なほざりなり」は形容動詞。「いいかげんだ・おろそかだ」という意味。鎌倉時代以降「あつさりしている」という意味でも用いられるようになった。

なお、説明文の冒頭にある「よき人」は「身分が高く教養がある人」と訳すことが多い。これも頻出なので覚えておきたい。

古文・読解

(問題冊子P.49～P.48)

解答

- |    |   |    |   |
|----|---|----|---|
| 問一 | ② | 問二 | ⑤ |
| 問三 | ア | ①  | ③ |
| 問四 | ③ | ④  | ⑥ |
| 問五 | ① | 問六 | ④ |

解説

問一 「御覧する」は尊敬の動詞「御覧す」の連体形で、「ご覧になる」の意である。リード文から、ここは帝と中納言の対面の場であることがわかるので、尊敬表現にふさわしい帝を主語と考えよう。中納言も「まゐり給へる」のように尊敬表現をとられてはいるが、相手が帝となると、中納言の動作には謙譲表現も加わるはずだからである。また、「年ごろ」は古今異義語で、「長年・数年来」の意。したがって②の解釈が正しい。

問二 傍線部Aをはじめ、「御目もおどろきて」「ものもおほせられで」「涙おとさせ給へる」は、すべて帝の動作・状態を表している。そうした様子に「かたじけなき(≡恐れ多くもつたいない)」と感じているのは中納言である。したがって、傍線部Bの「我」は中納言。また、「え：ず」は「：できない」の意であるから、「中納言は心強い状態ではいられない」と直訳できる。「心強い状態ではいられない」とは、心が弱り、ものに感じやすく、涙もろくなることと考えられる。中納言は、自分と対面し感涙<sup>かみなみ</sup>にむせばれる帝のご様子に、自らも

感きわまり、涙をこらえきれなかったのである。  
**問三** 敬語を鍵にして、省略された主語をとらえる設問。

波線部⑦を品詞分解してみよう。

尊敬 尊敬  
 形容詞 動詞 助動詞 動詞(補助動詞) 助詞  
 くはしく／問は／せ／給ふ／に

右のように、尊敬の助動詞「す」の連用形「せ」に、尊敬の補助動詞「給ふ」がついた用法を、最高敬語といい、地の文においては、帝、皇后、中宮、東宮(≡皇太子)などに用いられる。したがって、ここでは主語は帝である。

波線部④も同様に見てみよう。

謙讓 尊敬  
 動詞 動詞(補助動詞) 助詞  
 奏し／給ひ／て

「奏す」は、絶対敬語と呼ばれ、「天皇に申し上げる」の意である。「給ひ」と尊敬表現がとられていることを考えあわせると、主語は中納言。絶対敬語は「皇后(中宮など)に申し上げる」の意の「啓す」と、「奏す」の二語のみだから、覚えておこう。

**問四** 二重傍線部④「この世」と二重傍線部⑥「見し世」を対照させて考えるとよい。二重傍線部⑥の「し」は、過去の助動詞「き」の連体形。したがって、二重傍線部⑥は「かつて見た世界」、それに対し、二重傍線部④は「今の世界」となる。そこで、リード文から、中納言が唐から帰国したことがわかっているので、二重傍線部④は日本、二重傍線部⑥は唐を表していると仮定して読んでみよう。中納言が、帰国後、宮中での管弦の御遊びに新鮮な感動をおぼえ、唐での経験を思いおこしている場面であることがとらえられれば、仮定が正しいことの裏付けとなるだろう。

**問五** まず、傍線部Cの和歌を詠んだのはたれかを考えてみよう。和歌のすぐ後に「と仰せ言あるに」とある。「仰せ言」は「帝など高貴な人のご発言・ご命令」の意。したがって、傍線部Cの和歌は帝が詠んだものである。帝のメッセージは、再会した中納言に向けられているので、「別れては」は「あなた(≡中納言)と別れた後は」の意である。

また、「雲井」には「雲の湧く所・天高い所」の意と、「宮中」の意があり、ここでは掛詞のよいうな役割をしている。

それを踏まえて、和歌のメッセージをとらえて

みよう。

(歌) 別れては 雲井の月も くもりつつ  
 かばかり澄める かげも見ざりき  
 =  
 (訳) 中納言と別れて後は、  
 宮中  
 天空) の月もくもりがちで、これほど澄んだ月の光も見なかった。

したがって再会を果たした今は、「かばかり澄めるかげ」を堪能していることになる。中納言が不在の間は、寂しさのため、月もくもって見えたが、今は、晴れ晴れと嬉しい気持ちのため月の光も澄んで美しいというのである。気持ち次第で景色も違って見えることを利用して、再会の喜びを述べている歌とみなしてよい。

**問六** まず、破線部がだれの発言かを考えてみよう。第一段落は、リード文にもあるように、唐から帰国した中納言が、帝と対面している場面である。また、破線部の発言を合図に「御遊び」が始まっていることから、帝の発言だと推測できる。

次に、破線部の内容を確認してみよう。「遊び」は「管弦の遊び」の意、「すさまじう」は「すさまじ」の連用形で「興どめだ」の意、「おぼえ」は「おぼゆ」の連用形で「思われる」の意である。また、後半部分の「で」は、打消の接続助詞であるから、「聞かで」は「聞かないで」の意。帝は中納言が不在の間、楽の音なども聞かずに過ごしてきたのである。

なお、「すぐす」は「生計を立てる」という意味もあるが、ここでは文脈からそのまま「過ぐす・暮らす」と解釈すべきである。したがって④が誤り。

**【現代語訳】**

帝のもとにお召しがあつて(中納言が)参上なされると、長い年月を隔てて(久しぶりに中納言を)ご覧になる(帝の)ご様子は、驚くほどでこの世のものとも思えない。御目をみはり、しばらく(感激して)ものもおつしやらないで、涙をこぼしていらつしやる(帝の)ご様子が、恐れ多いのにつけて、自分(≡中納言)も意地をはりきれず(涙をこぼした)。向こうの国(≡唐)であつたことなどを、(帝が)詳しくおたずねになるので、(中納言は帝の)御前をすぐに立つわけにはいか

# 漢文・知識

(問題冊子P.47～P.44)

解答

7	6	5	4	3	2	1
(1)	(1)	(1)	(5)	(1)	(1)	(1)
(4)	(4)	(3)	(4)	(4)	(4)	(5)
(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(6)	(2)
(2)	(1)	(1)	(3)	(3)	(2)	(1)
(3)	(3)	(3)	(3)	(3)	(7)	(3)
(1)	(4)	(4)	(1)	(1)	(5)	(4)
			(4)	(4)	(8)	(4)
			(3)	(3)	(5)	(5)
						(4)

解説

- 1
- (1) 漢文の基本構造に関する設問。漢文で下から上に返って読むのは、原則として**述語と目的語・補語の関係、返読文字**である。
- 述語と目的語・補語の関係**とは、「目的語(主に送りがなにヲをとるもの)・補語(主に送りがなにニ・ト・ヨリ・ヨリモをとるもの)から、原則として上の述語に返って読む(例読書一書を読む)」ということである。**返読文字**とは、目的語・補語を下にとらなくても、下から上に返って読む文字である。主な返読文字に「有・無・不・多・少・欲・所・可」などがある。
- 設問では、目的語(ヲ)をとる「聞」「謀」「内」と、返読文字「有」「不」への返り方に注意して、返り点を組み合わせることができたであろうか。意味は「都の人の中に、田成子を国都に入れず、追放してしまおうとの陰謀を企てた者がいたことを(うわさに)聞いた。」である。
- (2) 返り点の付け方には優先順位がある。一文字だけ返るときには必ず「レ点」を用い、「一・二点」を用いてはならない(例1)。二文字以上返るときには「一・二点」を用いる(例2)。「上・下点」は必ず「一・二点」を挟む形になる(例3)。教科書などで「上・下点」が出てくる文を見て確認してほしい。

ない。日が暮れたのに、雪もいつそう降りしきり、月もとても見事に明るく昇ってきた。

「(中納言不在の間は)管弦の遊びなども興ざめて思えて、とりたてて楽の音なども聞かないで過ごしてきたので」と(帝は)おっしゃって管弦の遊びが始まる。中納言は(久しぶりの)この世(日本)の事の数々を清新に思われて、かつて見た世(唐)の春に似ていた折りのありさまなど、何事についても自然とたいへん感慨深くお思いいになるので、心を落ちつけてかき鳴らしなされる箏の琴の音が、すばらしくしみじみと趣深いことこの上ない。(中納言の琴が上手なのは)例のとおりなので、涙をとどめることのできる人はなかった。(中納言が)褒美の御着物をいただきなさることは、いつもどおりの事であったよ。

あなたと別れて後は、宮中で見る大空の月もいつも(涙のために)くもつて、これほど澄んでいる光も見なかった。

と帝のお言葉があると、とても並々ならぬことなので、(中納言は)もつたいないとお思いになる。

(なつかしい)ふるさと日本のかたみと思つて大空を振り仰いで見て月がしみじみとせつなかつたことよ。

と、帝に申し上げなまつて、(帝の御前から)お下りになつてすぐに拝舞の札をなさる。

**出典** 『ほまつあほうなごん 浜松中納言物語』

(例1) ○2、1 ×2、1

(例2) ○3、1、2 ×3、1、2

(例3) ○5、3、1、2、4 ×5、3、1、2、4

- (3) 「上下点」までの「返り点」についての設問である。「上下点」とは、「一二点」を用いた部分をはさんで、さらに下から上に返る場合に用いるものである。今回は特に、「上下点」の間に「中点」を用い、「下→中→上」の順番で読むことを確認してほしい。設問は「子孫のためを思って、(財産となる)よい田畑を買っておかない。」という意味である。
- (4) 「上下点」に「レ点」を組み合わせた「返り点」についての設問である。「一二点」を使用している部分をはさんで返るときには、この「上下点」を用いる。「上点」を読んだら直ちに「下点」(「中点」がある場合は「中点」)に返る。また「一」で漢字を結んで熟語とする場合は、例えば「4、2、3、1」といった語順で訓読する。設問文の意味は「小さな悪だからといって、それをしてはならない」。

## 2

- (1) ここでのポイントは二つ。一つは「日本語の助詞・助動詞に当たる漢字はひらがなに直す」。もう一つは「句末の助字(乎・邪など)」の読み方である。疑問文では「(連体形十)か」「(終止形十)や」と読み、反語文では「(未然形十ん)や」と読む。ここでは「べけん」と読んでいるので反語文だとわかる。設問文は「どうして一日たりとも名君がなくてよかろうか、いやよくない」という反語の意味。
- (2) 書き下し文のルールに関する復習である。「將」は「まさしく(未然形十)ントす」と読み、「今にもくしよとす」という意味を持つ再読文字である。ここで、書き下し文のルールとして、再読文字の一度目の読みはそのまま漢字を当て、一度目に読む部分はひらがなで書くということを出す必要がある。最後に、助詞・助動詞に当たる漢字はひらがなに直すということにも注意すれば正解に到達できる。
- (3) 書き下し文のルールとして、「助詞・助動詞に当たる漢字はひらがなに直す」・「疑問詞はそのまま漢字をあてる」という二点が確認できたであろうか。これにより「不・可」(助動詞)「乎」(助詞)はひらがな、「安」(疑問詞)はそのままということになる。設問は、「べけん

(可)」から反語であると判断でき、「乎」は「や」と読み、「どうして楽しまないということができようか、いや、楽しまずにられない。」という意味になる。

- (4) 漢文を書き下し文にするときは次の二点に気をつけよう。
- ① 日本語の助詞・助動詞にあたる漢字はひらがなに直す。
  - ② 読まない字(置き字)は書かない。
- 設問では「可(ベシ)」「也(や)」がそれぞれ助動詞・助詞にあたるのでひらがなに直す。また再読文字は一度目を副詞として読み、二度目を助動詞として読む。設問では「未ダ」は副詞なので漢字、「ず」は助動詞なのでひらがな。また、反語の場合は、文末は「く未然形十(十や)」となることが多いので、ここは「くべからざらんや」となる。
- (5) 「方法・手段・処置」を問う疑問文に関する設問。くをどうしようか・くをどうしたらよいだろうか」という疑問には、「くヲ如何せん」という形がある。目的語(くヲ)を「如」と「何」の間に置き、目的語から「如」に返るように返り点をつけることに注意しよう。設問では「吾民(我が国の人民を)」という目的語が「如何」の間に置かれて、「如」に返るように「一二点」が施されている。書き下し文は「吾が民を如何せん。」となる。
- (6) 漢文の使役形は「**主語** **使** **A** **B**(動詞未然形)」《**主語** **A** ラシテ **B** しム》のように「使(教・遣・令)」を使役の助動詞として扱い「しム」と読むのが普通だが、これらは本来動詞である。「連わせる・命じる」というニュアンスを強調したいときには「遣」などを「遣はして」と読み動詞として扱い、動詞**B**に「しム」と送りがなをふる。これを「使役を暗示させる動詞を用いた使役形」という。こうした動詞には「遣(つぱんシテ)・説(トキメシテ)・命(メイシテ)」などがある。このケースでは動詞**B**に「しム」をおくるのを忘れずに。
- (7) 「為A所B」は「AにBされる」という受身形で訓読は「AノBスル所ト為ル」と「Aの為にBせらる(動詞が四段活用なら「る」)」の二通りある。返り点の付け方に注意し、「所」より先に「為」を読んでいれば後者に読む。
- (8) 漢文を書き下し文に直すためのルールを確認する設問である。

書き下し文のルールで重要なことは「置き字は書かない」「助動詞・助詞にあたる漢字はひらがなに直す」「その他は漢字のまま残す」という三点である。特に注意を要するのは「可(ベシ)」「若・如(ごとシ)」のような助動詞はひらがなに直す。「安(いづクンゾ・いづクニカ)・何(なんゾ)」のような疑問詞や「其(そレ)」「此(コレ・コノ)」のような指示語は漢字のまま残す、という点である。

- (9) 返読文字「有」に関する設問である。返読文字「有」は「者」を伴って「〜者有り」と読み、「〜という人がいる。〜する人がいる」という意味になることがよくあるので注意しよう。

3

- (1) 一文に否定語が二つ入る形には①「二重否定」②「仮定形」③「『AでもなくBでもなく』と並列させる形」がある。そのうち①の二重否定は下の否定語が上の否定語より先に読まれるが、②と③は上の否定語の方が先に読まれる。設問では上にある「無」・「信」の「無」の方が、下にある「不」・「立」の「不」よりも先に読まれる形である。なお②の仮定形の場合は「AずンバB(セ)ず」あるいは「AせざレバB(セ)ず」と訓読する。

(例1) ↓下の否定語の方が先に読まれる。

- ① 無<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>知<sub>ル</sub>。(知らないものはいない。)

(例2) ↓上の否定語の方が先に読まれる。

- ② 不<sub>レ</sub>入<sub>ル</sub>虎<sub>ノ</sub>穴<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>得<sub>ル</sub>虎<sub>ノ</sub>子<sub>ヲ</sub>。  
(虎の穴に入らなければ虎の子を手に入れることはできない。)

- ③ 無<sub>レ</sub>老<sub>シ</sub>無<sub>レ</sub>小<sub>シ</sub>皆<sub>シ</sub>樂<sub>ム</sub>。  
(老いも若きも皆楽しんでる。)

- (2) 反語形の「豈(ソレ)乎(ヤ)〜」(「どうして〜だろうか、いや〜でない。〜」)に関する設問。「反語」とは、疑問の内容とは反対の意味を表して強調する表現である。「豈」だけでなく「何(なん)・安(いづクンゾ)」をはじめとする他の疑問詞も、そのまま反語形にも用いられる。

疑問形と反語形の違いは、本来文脈から判断するが、訓読では、

- 疑問形の文末は「連体形」で結ばれることが多い。
- 反語形の文末は「未然形」に推量の助動詞「ン」をつけ、「未然形十ン乎(または「ヤ」)

で結ばれることが多い。

という傾向がある。設問も、文末の「有らん乎」から反語形であるとわかる。「豈」は、文末に「乎・哉・邪」といった助字がなくても、「ンヤ」という送りがなで結び、反語形を表すことが多いことも覚えておこう。

- (3) 「則」は「〜レバ則チ」という形で、条件節を導く用途で多用されるものである。漢文において「すなはち」と読む漢字は、「則・即・乃・便・輒」と数が多いので、その意味の違いを整理しておく必要がある。また、「為<sub>ル</sub>A所<sub>レ</sub>B」は「AにBされる。」という受身の意味になることも確認しておこう。
- (4) 「為A所B」の句形が正しく理解できているかを問う設問である。「Aの爲(ため)にBせらる」の訓読も知っておけば「A」に当たるものが動作を行う者であることが容易に記憶できる。

4

- (1) 「所以」は「ゆゑん」と読み、「〜という理由」と訳す。「いはゆる」は「所謂」、「おもへらく」は「以為」、混同しないように整理しておこう。

- (2) 「自」には、副詞として「みづかう(自分で)・おのづかう(自然に)」という用法がある。今回は返読文字で「〜より」と読み「〜から」の意味で、場所・時間の起点を表す用法であるので注意を要する。同じ用法のものには「從・由」がある。

- (3) 「忽(たちまち)」は「いつの間にか」「ふと」「突然」という意味の副詞。副詞の読みは頻出。また「愈(いよいよ)」||「だんだん」など、訓と現代語のニュアンスとが微妙に違うものも少なくないので整理しておこう。

- (4) 重要な多義語である「若」が理解できているかを確認するための設問である。

「若」は「もし(仮定)」「ごとシ(比況)」「しく(比較)」など多くの読み方と意味をもつのできちんと整理しておこう。この「若」と同様な働きをする重要な語に「如」がある。あわせて整理しておこう。

「莫」は「無」と同じ意味で「なし」と読むことも大切。「莫(=無)若(=如)A」は「Aに及ぶものはない・Aが一番である」という意味の最上級を表す句形である。

- (5) 「勝」の意味には「勝つ・優れる」のほかに



「たフ」と読んで「たえる・もちこたえる」や、「あゲテ」と読んで「ことごとく」というものがある。設問では「感嘆を抑えることができない」という意味。

## 5

- (1) 漢文の中には現代の私たちが使っている言葉と同じ読みでありながら、その意味が違うものがある。この「故人<sup>こじん</sup>」という語はその代表的なものである。「故」には「殺す。死ぬ」の意味があり、日本では「故人」を「亡くなった人」の意味で用いている。しかし、「故」には「古い。なじみ」の意味もあり、漢文で用いられる「故人」の意味である。
- (2) 漢文を読む際には思想的な背景を持つ語にも注意しなければならない。「君子」という語は『論語』において、徳の高い人物として描かれて以来、中国人が理想とする人物像としての意味を持つに至った。ここではその「君子」とは反対に「①徳のない人。②身分の低い人」の意味を持つ語も合わせて確認してもらいたい。
- (3) 現代の私たちが使っている言葉でありながら、漢文ではその読み、意味ともに違うものに関する設問である。漢字の読みで中国から伝わったものには漢音（進行<sup>しんぎょう</sup>）・呉音（修行<sup>しゅうぎょう</sup>）・唐音（宋音）（行脚<sup>ぎょうかく</sup>）という三種類がある。「百」の「ヒヤク」は呉音であるが、漢文では普通漢音での読みを基本とする。「姓」を「セイ」と読むのは漢音、「ショウ」と読むのは呉音での読み。漢文では「百姓」を「ヒヤクセイ」と読み、「①人民。庶民。②多くの官吏」という意味で用いる。

## 6

- (1) 夫子は男子に対する敬称で「ふうし」と読む。「先生」という意味で用いられることが多い。特に孔子を指すこともある。
- (2) 「寡」は「寡黙・寡占」といった熟語から〈少ない〉という意味を思い出せたであろうか。「寡人<sup>けふじん</sup>＝少ない人」とは、諸侯が自分のことを謙遜して〈徳が少ない人である私〉という意味を持たせた自称である。

## 7

- (1) 「車胤<sup>しやういん</sup>聚螢<sup>しゅうえい</sup>」と「孫康<sup>そんこう</sup>映雪<sup>えいせつ</sup>」の二つの故事を合わせた語。車胤も孫康も貧しくて明かりの油

が買えなかったため車胤は螢を集め、孫康は雪を明かりにして苦学をした。二人とも後には出世を果たした。

- (2) 「孟母<sup>もうぼ</sup>断機<sup>だんき</sup>」とは、孟子が勉学のなかばで帰郷したとき、孟子の母親が機で織りかけの織物を断ち切って、学問を中断するのはこれと同じで、途中でやめてしまつてはしようもないと言つて孟子を戒めた故事によつてできた語である。「断機の教え（戒め）」ともいう。
- (3) 「君子豹<sup>ひょう</sup>変<sup>へん</sup>」は「君子」は立派な人「豹変」は豹の模様のようにはつきりわかりやすいこと。それで「立派な人は過ちに気づいたらさつとだれにでもわかるように改める。」ということで、良い意味で変わることを表すのが本来の意味。しかし、現在では悪い意味で変わることに使う場合があるので注意が必要である。